シニア演劇活動への参加過程の分析
―東海地方で活動するシニア劇団の稽古場から―
Analysing the process of participation in senior theatre: From the training space of a Tokai region-based senior theatre club

中山　佳子
NAKAYAMA, Kako

Abstract

In Japan, as a super-aged society, supporting senior citizens to participate in social activities is a societal challenge. Senior Japanese citizens have been engaging in various activities, and this paper focuses on one of them: the senior theatre. In recent years, the senior theatre has become one of the popular cultural activities among senior Japanese citizens. Interestingly, most of the participants join as beginners, thus will learn how to perform/act through the club activity.

This paper aims to describe the process of participation in the senior theatre club and clarify the participants' learning process by focusing on the spatial configuration of the training space. With this aim, qualitative data from members of a senior theatre club in the Tokai region was collected through participant observation and semi-structured interviews.

By applying Lave & Wenger's concept of legitimate peripheral participation, this paper analyses data, showing that the arrangement of the training space both expands and limits the participants' participation style. There are three types of arrangements of the training space: a space with a grouped desk, a space with a grouped desks and a staging area, and a space with a stage and audience seats. The early stage of practice was conducted with the first arrangement where participants sat around grouped desks and read through the script. After several times of reading, the spatial arrangement was changed to comprise a staging area along with the grouped desks. With this arrangement, participants start moving while they read the script. Finally, before the public performance, participants practiced in a space with a stage and audience seats. These shifts in the training space arrangement affects the participants' performance, such as their gaze or posture. Also, it affects their style of engagement, such as communication and learning style. In addition, as the practice phase progress, participants become more aware of their role and sense of belonging in the senior theatre club.

In senior theatre, learning is not a simple task of memorizing. Instead, by engaging with other participants through training, participants understand how they should act/perform and acquire the

attitude they need to obtain as an actor: the participation itself is a learning process.

キーワード：*シニア演劇　状況的学習論　正統的周辺参加　高齢者　社会活動*
Keywords: Senior theatre, Situated learning theory, Legitimate peripheral participation, Elderly people, Social activity

１．はじめに

近年、日本国内ではシニア演劇の活動が広がりをみせている（園部, 2017; 五島, 2020a）。シニア演劇とは、中高年が役者として参加する演劇活動である。国内のシニア演劇の特徴には、年齢を重ねたからこそ可能な表現を追求する活動である点が挙げられる。五島（2020a）は、演劇人が主催するシニア演劇の特徴として「高齢者による演劇表現追求を目的」（p.122）とする点を指摘している。また園部（2015）は、2006～2007 年頃からは、高齢者による上演活動のねらいとして、「シニア世代の活力を引き出し、セカンドライフを充実させる」（p.60）ことや、「高齢者だからこそできる身体表現を追求する」(p.61) ことが、語られ始めたと指摘している。園部（2015）は、高齢者による上演活動のねらいとして「セカンドライフの充実」が語られ始めた背景について、団塊世代が 60 歳に到達することによる「2007 年問題」の発生が予測され、「退職後の活動の場が求められていた時期であった」（p.61）ことに言及している。この点からは、シニア演劇の活動に社会参加の場としての価値が見いだされていたことが分かる。さらに言えば、シニア演劇は、高齢社会における課題を解決しうる文化活動として見なされていると考えられるのだ。

先行研究において、シニア演劇活動は、高齢者の社会参加を含む超高齢社会の社会的課題に寄与するとして、クリエイティヴ・エイジング（Creative aging）の観点から注目されている（太下, 2016; 五島, 2020b）。クリエイティヴ・エイジングとは、老いを受容し、後年の人生を創造的に生きる加齢観のことである（Bradfield, 2021; 森川・桑原・杉浦・金子, 2007）。シニア演劇は、高齢者が主体となり、高齢者施設の外部で行う活動である点から、クリエイティヴ・エイジングの取り組みとされ（太下, 2016）、その効果が期待されている。以上のようにシニア演劇は、人生後年の創造活動の場としてその価値が見いだされているものの、シニアが演劇活動に参加する具体的プロセスについては、未だ十分に検討されていないのが現状である。

そこで本研究は、東海地方で活動するシニア劇団柳塾（仮名）での参与観察及びインタビュー調査を通して収集したデータを用いて、シニア演劇の活動過程を記述し、新規参加者による活動参加の過程を、①稽古場の空間構成が活動に及ぼす影響と②成員及び成員間の芝居に関する行為に生じる変化に着目することで明らかにする。そうすることで、社会参加の場としてシニア演劇への参加を検討する者が、参加過程の見通しを立てる際の一助となることを期待する。

２．実践共同体としてのシニア演劇

本研究は、シニア演劇に参加した者が活動参加を進めるプロセスを明らかにするものである。活動の新規参加者は､活動に必要な知識や技術を他者から一から十まで順に教わるのではなく、参加先の劇団内での経験を通して学んでいく。そのため、シニア演劇の参加過程の究明には、参加者が何を学ぶのかという学習内容ではなく、どのように学びを進めているのかという参加過程そのものに着目する必要があるのだ。この点には、学習を「知識の内化の過程」（レイヴ＆ウェンガー, 1993, p.22）ではなく､「共通の専門スキルやある事業へのコミットメントによって非公式的に結びついた人びとの集まり」（ウェンガー et al., 2002, p.12）である実践共同体に周辺から参加し、十全的参加へと向かう過程として捉える状況的学習論との親和性を指摘することが可能である。また、参加という観点から学習を捉えることが本研究の課題究明にも有効だと言える。

状況的学習論において、実践共同体の新規参入者、すなわち新参者は、活動に参加し、共同体内外の権力関係に巻き込まれながら知識や技能を身につけ、実践活動への参加度合いを高めていく。こうして十全的参加へと向かうなかで、一人前としてのアイデンティティを形成していくのだ。つまり状況的学習論は、実践共同体に参加する度合の増加を学習として捉えるのである（Lave, 1991; レイヴ＆ウェンガー, 1993）。このように、実践共同体の活動状況に規定された学習の特徴を示す概念として、正統的周辺参加は提示された（レイヴ＆ウェンガー, 1993）。

「理解と経験は絶えざる相互作用のうちに」（レイヴ＆ウェンガー, 1993, p.28）あると考える正統的周辺参加の概念は、実践活動の状況において、成員が実践活動との関わりを変化させ、全人的な意味で学習を進める過程や方法を問題とする。関連して、活動全体へのアクセスは勿論、古参者や共同体の他の成員､「情報、資源、参加の機会」（レイヴ＆ウェンガー, 1993, p.84）等へのあらゆるアクセスは、実践活動への理解を促進させ、参加方法に影響を与える。そのため、実践共同体での学習を分析する際の重要な論点となっている。以上のように、レイヴ＆ウェンガー（1993）は､正統的周辺参加の概念をもって学習を社会的実践の一部として定式化し、社会的実践活動そのものを学習過程として分析する新たな糸口を示した。

先述のとおり、実践共同体における学習では、活動でのアクセスの獲得が重要とされるが、活動へのアクセスを構成するものには､活動空間も含まれる。レイヴ＆ウェンガー（1993）は、肉加工職人の学習を論じたマーシャルの研究抄録を引用し（レイヴ＆ウェンガー, 1993, pp.87-88)、作業場が仕切られることが、作業へのアクセスを制限したことを指摘し、活動の工程や作業に必要な道具や人員の配置による空間構成が学習に与える影響を論じた。このように空間構成は、実践活動への関与方法を操作するのだ。

以上を踏まえ､本研究は､人間の認知を状況に依存したプロセスとする状況論の系譜にあり、

レイヴ＆ウェンガーに代表される状況的学習論から正統的周辺参加の概念を援用することで、柳塾をシニア演劇という実践活動を行う実践共同体とし、柳塾の新規参加者が実践活動に参加する過程を明らかにする。その際、活動が行われる空間構成に着目しながらシニア演劇活動におけるアクセスの問題も検討する。

なお、本研究では、演劇経験の有無に関わらず柳塾の新規参加者を新参者とする。なぜならシニア演劇の活動を柳塾という実践共同体の活動として捉えるからである。活動期間を一年とする柳塾は、年単位で共同体の成員も取り組む演目も変化する。つまり、活動状況は毎年変化するのだ。たしかに演劇経験は、成員間の関係に多少の影響を与えることが予想される。しかし共同体への参加という意味では、誰もが新参者だと言えるのだ。そのため本研究は、演劇経験がない初心者と、経験者だが柳塾の活動には初めて参加する者を両者ともに新参者とし、柳塾での演劇経験を持つ参加者を古参者とする。また本研究で古参者・新参者を包括して示す際は「参加者」の語を、演出家やスタッフを含む実践共同体の一員としての側面を強調する際は「成員」の語を使用する。

３．調査概要

仮名	インタビュー時間
泉	52 分
本宮	50 分
志知	38 分
葉山	33 分
守谷	48 分
當	1 時間
藤山	1 時間 10 分

表１　研究参加者一覧

本研究は、東海地方で 2016 年から活動を行うシニア劇団「柳塾」（仮名）の 2019 年度の活動（2019 年 2 月～11 月）から得られたデータを分析対象としている。調査は、2019 年 2 月 12 日～11 月 26 日に断続的に実施した。調査方法は、インタビューと参与観察を採用した。筆者は、稽古風景の撮影や休みの参加者の代役を務めるサポートスタッフとして活動に参加しながら調査を行った。参与観察に関しては、活動参加前に劇団の主催者にメールで研究説明を行い、参加の許可を得た後、初回参加時に口頭で参加者に対しても研究説明を行い、同意を得た。インタビューは、半構造化インタビューを実施したが、研究参加者の語りの文脈を最優先とし、話

を遮らないように注意した。インタビューは、柳塾の稽古前後に稽古会場近辺のカフェで実施する他、稽古のない日に筆者の所属する大学内のカフェで実施した。また、インタビューでは、書面と口頭で調査研究の概要と個人情報の取り扱いに関する説明を行い、研究参加の同意を書面で得た。なお、個人情報保護の観点から、研究参加者の語りのなかで役名が呼称として使われた場合は、仮名を〈〉に入れる形で示した。研究参加者は、2019 年度の活動参加者八名（男：女＝2：6）である。インタビュー調査は、活動期間中に参加者全員に実施したが、一名分の音声データが不鮮明であったため当該インタビューの音声データは分析データから除外し、七名分（70 代：60 代：50 代＝1：5：1）の逐語録を作成した。インタビューを実施した研究参加者の一覧は、仮名を用いて表 1 で示した。

4．柳塾の活動過程と参加方法の変化

本節では、柳塾の活動概要と活動過程の区分を示した後に、活動場所の空間構成に着目しながら成員の語りと成員間の相互行為を記述・分析し、活動過程における新参者の参加方法の変化を明らかにする。なお、参加過程の変化を示す事例としては、新参者である藤山さんの参加方法の変化を取り上げると同時に、藤山さんに影響を与える古参者として泉さんとの相互行為に着目し、他の参加者の語りは適宜参照する。この二人の相互行為に焦点を当てる理由は、活動状況における古参者と新参者の影響関係を捉えやすくなると考えるからだ。藤山さんの出演シーンにおいて、台詞の上でも出番の上でも最も長く関わりを持つ古参者が泉さんなのである。そのため演劇活動において最も重要な活動である演技をする際に関わりを多く持つ藤山さんと泉さんの相互行為に焦点を当てることが新参者と古参者の影響関係の分析に有効だと考えた。

4．1．フィールドの概要と活動過程の区分

柳塾は、演出家兼団体代表の宮崎さん（仮名）と、スタッフとして参加しながらお芝居にも参加するまりさん（仮名）、そして参加者から構成される。参加者は一年毎に募集するが、継続参加も可能である。2019 年度の活動は公演前後を除いて基本的に週に 1 回、3 時間、文化施設内で行われた。稽古の間には、15 分程度の休憩が 2〜3 回入る。公演 1〜2 ヶ月前からの活動は、週 2 回に活動日が増えた。そして、公演の一週間前からは、公演会場でほぼ毎日稽古が行われ、公演終了まで会場で活動が行われた。いわゆる、小屋入りの期間である。公演終了後には、活動の振り返りの日が設けられ、その日をもって一年間の活動が終了した。

活動内容としては、初回から数回は自己紹介の時間が設けられ、参加者は共有可能な範囲で活動への参加経緯を話した。その後、シアターゲームや公演の演目とは異なる台本の読み合わせなどの活動を経て、公演演目の稽古に入った。公演演目の稽古は、着席状態で台本を読み合わせる本読みに始まり、動きをつけた立ち稽古に移行した。そして小屋入りの期間は、実際に

衣裳を着用し照明や音響とあわせて舞台の転換点（きっかけ）を確認する稽古（場当たり）や、本番通りの段取りで行う通し稽古（ゲネプロ）を行った。

事例の分析にあたり、活動内容と活動空間の使用法に着目し、活動過程を三つに区分する。活動過程の区分にあたり、活動内容のみならず活動空間にも着目するのは、明確に活動過程の変化を捉えるためである。例えば、本読みや立ち稽古といった活動内容のみを参照すると、文化施設で行われる立ち稽古と、公演会場でのそれを区別できない。これでは、公演会場での照明や舞台美術・音響装置の使用、客席が設営された環境が活動に与える影響を見落とす恐れがある。そのため活動空間の使用法にも着目するのである。

まず、活動開始から立ち稽古まで（2019 年度は、6 月中旬まで本読みだけの稽古が続いた）を初期とする。主な活動内容は、自己紹介と本読み、台本に関する話し合いであり、机で作られた島を囲む形で行われた（図 1）。次に、立ち稽古の開始時期から公演月前まで（2019 年度は、6 月中旬から 10 月末まで）を中期とする。主な活動は、立ち稽古であり、先に示した机の島と舞台と想定される空間で行われた（図 2）。最後に、公演直前から公演中の期間を後期とする。主な活動は、中期と同様に立ち稽古だが、本区分の活動は、舞台と客席が完全に区別された公演会場で行われた（図 3）。以上のように、本研究で参加過程の変化を三つの活動区分に沿って分析する。

4．2．初期：机の島空間（自己紹介・本読み）

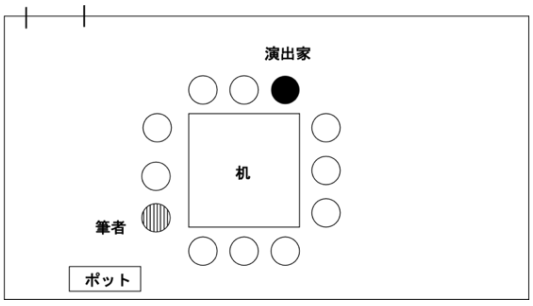

図 1

初期の稽古は、机の島空間（図 1）で行われる。２回目の活動以降、半ば固定された演出家の座席を避ける形で、参加者は自由に着席する。机の島空間では、着席位置次第で他の成員との位置関係に死角が生じる。着席状態は、隣り合う参加者との会話を容易にするが、着席位置が離れると会話の機会や視線を交わす機会など、他の参加者との関わりを生じにくくする。

初期は、初回から数回の稽古にかけて自己紹介を行う。自己紹介は、参加者の自己紹介に対して演出家が質問をする形で進む。そのため、自らの自己紹介の時間を除く大半の時間は、他の参加者の話を聞く形での参加になる。この他の活動として、着席状態で台本を読み合わせる本読みの活動がある。本読みは、台本を持ち、紙上の台詞を目で追いながら行うため、参加者の視線は、常に台本に向かっている。本読みでの成員間の相互行為は、演出家から参加者に対

する指示やそれに対する参加者の反応がほとんどであり、参加者同士の相互行為は台詞の前後関係がある場合に生じる程度である。このように、初期の活動は、参加者同士の相互行為の機会も少なく、活動のほとんどが声で成立するものであった。

初期の参加者間の相互行為のほとんどが、声によるそれで成立していたことは、2019 年度の活動初期に例外的に組み込まれた外部講師の稽古についての藤山さんの語りに表れている。

> 大変だったのは、演技指導の先生がいらっしゃった時が初めて大変だった。ほんとに、あ、お芝居するんだと思った。それまでは雑談で、いままであなたの人生どんなでしたぐらいだったから、もうおしゃべりして帰ってくる程度で。（藤山, 2019）

外部講師の稽古では、様々なシアターゲームが行われた。そして、着席状態で行う通常の稽古とは異なり、起立し、視線や身体を動かすことが求められた。なお活動の空間構成は、中期の空間と類似していた。外部講師の稽古以前の活動が、「おしゃべりして帰ってくる程度」と表現される点からは、初期の成員間の相互行為が日常的会話を主としていたことが分かる。さらに、「あ、お芝居するんだ」という語りからは、外部講師の稽古を受けることによって、柳塾の活動に参加して以来初めて演劇活動への参加を意識したことが分かる。

以上のように、活動初期の参加方法は限定的なものであった。月謝を支払い、自己紹介を交わす参加者たちは、確かに正統な活動参加者である。しかし、活動への参加は声だけでも成立する限定的なものであり、演劇活動に参加している認識も低かった。この点において、活動初期の参加は、周辺的なものに留まっていた。

4．3．中期：仮想舞台と机の島（立ち稽古）

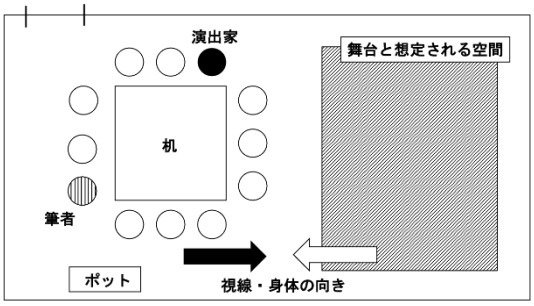

図 2

中期の主な稽古内容は、立ち稽古である。立ち稽古とは、立って動きをつけて芝居をする稽古であり、机の島空間と仮想舞台の空間が設けられた場所で行われる（図 2）。立ち稽古において参加者が、台本を手放す時期は様々だが、古参者の泉さんは、予告なく始まった初めての立ち稽古の日にも、台本を持たずに稽古に臨んでいた。新参者の藤山さんは、泉さんの姿に強く驚いたことを次のように語っている。

まず最初に〈泉〉さんのすごく台詞がはじめっから舞台でずっと出てね、それを彼女が台本をぽんと置いて前に出て話そうとし始めた時を見て、正直背筋凍る思いして恥ずかしかった。ああなんて甘く見たんだろうって。だから私なんかこんなんなのに、もっと頑張んなきゃいけない。（藤山, 2019）

「正直背筋凍る思いして恥ずかしかった」と泉さんの姿に驚きを示すと同時に反省を示す語りは、初めての立ち稽古で、台本を手放して芝居を始めた泉さんの姿が、藤山さんに演劇活動参加者としての自覚の欠如を意識させたことを表している。また前述の思いを「台本をポンと置」く姿から抱いた点からは、台詞を覚えて稽古に参加する古参者の姿勢を、立ち稽古時の理想的な参加姿勢として受け止めたことが分かる。このように中期の活動は、他の参加者の活動姿勢の観察を通して学びを得る機会が生じる。舞台と想定される空間と机の島の空間とに分割された活動空間は、参加者の間に演者と観客の関係性を作り出し、参加方法を複数可する。つまり、中期の参加方法には、芝居をする、芝居を見る、の二種類が認められるのだ。そしてこの関係性の成立は、参加者に対して参加者間での学びの機会を与えるのである。

参加者間での学びは、藤山さんと泉さんの例に見られるように、新参者が古参者の行為を真似る姿に確認できる。例えば、藤山さんは、泉さんの行為に影響を受けた経験を次のように語っている。

[小道具を]用意してきて（…）私こういう演技でやっているのよ、みたいに何もまだ監督が言わないときに、ああゆうの見せられたらさ、おわ〜って。そうか、だからもう私、なんかやれることないかなと思ってさ（…）それしかできないのよ。でもさ、それでもなんかさ、正直ちょっと参加している気になるわけよ。（藤山, 2019, [　]内筆者補足）

芝居で使用する小道具を自主的に用意して活動に参加する泉さんの姿に圧倒される形で、藤山さんは小道具を持参するという新たな参加方法を学んでいる。そして、準備が可能な小道具を検討し、持参を始めることで新たな参加方法を実践に移したのだ。さらに、小道具を持参する行為を、「正直ちょっと参加している気になるわけよ」と語るように、小道具を持参する参加は、藤山さんの活動への関わりを拡張させ、参加感を高めていた。

以上に加えて、二種類の参加方法、すなわち参加者が相互に観察し、観察される参加は、他の参加者との比較の機会や、自身の演技に対する他の参加者の反応を得る機会を生む。例えば、當さんは「皆さあ、すごいだんだん上手になっていくのにさ、もう自分はさあ、本当に」と、他の参加者の変化を観察しながら自身の演技の変化との比較を行っている。葉山さんも「他の方見てるとなんかすっごい自然にやってるなとかって思いながら、自分の時になると、あーど

うなんだろうな」と、他の参加者の演技を評価しながら自身の演技に不安を抱いていた。また、志知さんは、「他のメンバーの反応を観て、これは使えそうだ、あ、これはボツだ、と」と、自身の演技に対する他の参加者の反応を気にかけながら、自身の演技を検討していた。

以上のように、中期の活動では他の参加者との相互行為の機会が増加する。これは、芝居上の相互行為の機会の増加だけによるものではない。相互行為の機会の増加は、机の島と仮想舞台という活動空間が、参加者の間に役者と観客の関係性を成立させ、見る・見られるという関係を生じさせることで増加したのである。そして、参加者間の相互行為が増加するなかで、新参者は古参者から新たな参加方法を学んでいたのだ。

4．4．後期：劇場（公演直前）

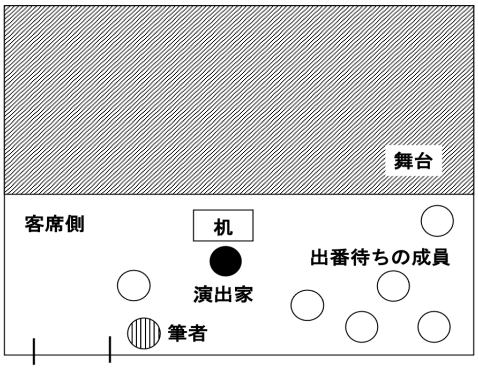

図 3

後期は、舞台と客席が完全に分かれ、舞台セットが組まれた公演会場で（図 3）で立ち稽古が行われる。小屋入り後は、通常の立ち稽古に加え、照明や音響等の舞台効果がついた状況での稽古や、公演衣裳を着用した通し稽古なども行われる。客席から観客の存在を意識する活動空間と、通常の稽古では参加しない照明スタッフが活動に参加する状況での後期の活動は、見られることを最も意識する活動区分だと言える。このように見られることを意識する後期の活動空間及び活動の内容は、参加者の芝居をする意識に影響を及ぼしている。後期に実施したインタビューで藤山さんは、稽古場からは離れた自宅での経験を次のように語っていた。

> 食事してる時に、お婿さんが何か話ししてて色々、咳をしたのすごく。で、マスクもしてね、私さ女優だからさ今風邪ひきたくないのよ帰ってって。そしたら、お母さんすみません、そうですね。（…）今行きますからねって。（藤山, 2019）

咳をした娘婿を見て、風邪をうつされ演技が出来なくなることを危惧した藤山さんは、女優だからと断りを入れマスクをし、娘婿に帰宅を願い出ている。自身を女優と意識した行為には、演劇活動に参加した自覚自体が持たれていなかった初期の参加態度からの変化が見られる。また、風邪対策を心がける行為からは、公演で演技をすることへの責任も伺える。さらに、この

意識が柳塾の活動空間を離れた自宅で保たれていたことは、役者としての意識が日常生活でも保持されていることを示唆する。後期にいたるまでに増加した活動への関わりと、舞台と客席という活動空間の構成は、藤山さんに役者であることを意識させたのである。

以上のように、後期、より正確には後期までの活動を通して、参加者は実践活動の成員としての自覚を高めていた。藤山さんの語りからは、初期及び中期では確認できなかった役者としての自覚の形成が確認出来た。新参者は、活動空間の変化とそれに伴う視線の関係性の変化に影響を受けながら参加方法を変化させ、参加感を拡張させたのだ。

5．参加方法の変化に関する考察—活動空間との関係から

本節では、前節の活動過程の分析を踏まえて活動空間と参加過程の関係性を検討し、いかなる経験や状況が参加者の参加方法に変化を促し、いかなる参加方法が活動との関わりを深めているのかを考察する。その際、レイヴ＆ウェンガー（1993）の正統的周辺参加の概念を援用すると同時に検討を加える。

5．1．観察・被観察の経験

まず、藤山さんの活動経験の語りから活動過程で生じた参加方法や意識の変化を促した経験について考察する。初期から中期への移行により、活動内容は自己紹介と本読みから立ち稽古になる。そして活動空間は、机を四角形にして作る机の島から、仮想舞台と稽古場面に出番がない参加者の待機場所としての机の島の空間に変化する。この活動空間の変化は、参加者の活動参加方法に視線や視野の点で変化をもたらす。初期の活動では、着席状態の参加者全員が類似する視野を持つが、中期の活動では、視線の向きが参加者の意志とは無関係に複数可される。この変化は、参加者を観察される立場と観察する立場に二分する。つまり活動空間が、観察者と被観察者の役割を生み出すのである。芝居の動線や立ち位置などを検討しながら、何もない仮想舞台に芝居の状況を作り込む立ち稽古を通して、参加者は、自らの動きを考えるために他の参加者の動きを観察し、同様に他の参加者から観察される。この状況で、参加者は観察者と被観察者の役割を交互に担い続けるのである。

ここで生じた観察及び被観察の役割は、新参者に活動への一つの「アクセス」（レイヴ＆ウェンガー, 1993, p.84）獲得の機会を与える。例えば、前節で引用した小道具に関する語りでは、新参者である藤山さんが小道具を持参する古参者である泉さんの姿に影響を受け、「なんかやれることないかなと思ってさ」と参加者として貢献できることの検討を始めていた。このように、古参者を観察する経験は、新参者が活動への関与と理解を深める契機、すなわちアクセスになっていると考えられるのだ。レイヴ＆ウェンガー（1993）は、新参者の正統的周辺性が、「『実践の文化』を学ぶ———それを吸収し、それに吸収される———やり方としての参加とい

う事態」（pp.76-77）を含むとしている。藤山さんは、まさに、古参者の観察から新たな参加方法を吸収したうえで、自分なりの形でその参加方法を実践に移そうと試みていたのだ。

さらに重要であるのは、新参者の役割が観察者の役割にとどまらないことである。新参者は、観察者であると同時に被観察者なのである。藤山さんは、中期の活動での古参者から自身の演技に質問を受けた経験を次のように語っていた。

> 〈泉〉さんが、「藤山さんここにこういう台詞台本にないよね」、「はい」、「それ言う？」、「うーん」、「言うか言わないかで、私のアテンドが違う。だから決めて」って。あそうかじゃあ、宮崎さんに相談。「うん、いいじゃん二人で決めて」、「わかりました」、「じゃあやっぱり私そこで、とかちょっとコメントしちゃいそうなので言うにしてください」。「分かったわ」って泉さん「言うのね、OK」（...）気をつけようって思って心に決めた。（藤山, 2019）

泉さんが藤山さんの演技に対して質問をする行為そのものが、藤山さんが泉さんの観察対象となっていることを表している。泉さんは、台詞についての質問を通して台本にない台詞が他の参加者に与える影響を藤山さんに意識させ、適切な手続きを踏んでその演技が集団で作り上げる芝居として成立するように調整する必要があることを教えている。泉さんの質問行為は決して藤山さんの演技の否定ではなく、台本にない台詞を台詞とする際の手続きを新参者に示す古参者の行為だと考えられる。このように被観察の立場にあることで、新参者は、実践活動への適切な参加方法を学んでいるのだ。このように、観察・被観察の役割は固定的ではなく、新参者を含む各成員が両方の役割を担いそれぞれを経験するのである。

以上のように、初期から中期の活動における活動内容と活動空間の変化は、参加者間に動的な観察・被観察という役割を成立させていた。それによって新参者は古参者を観察する機会と、他の成員から観察される機会を獲得していた。そして、観察者・被観察者となる経験を通して、新参者は活動への新たな参加方法を身に付けていたのである。

5．2．アクセスの自主的創出

次に、観察・被観察の経験によって獲得し、活動との関わりを深める参加方法を考察する。前節で確認した通り、藤山さんの参加方法の変化は、古参者の観察から得た学びを実践に移す変化に確認できる。藤山さんは、観察の経験から古参者の参加方法に学び、小道具を持参する参加方法を実践に移すことができたのだ。このとき藤山さんが新たに始めた参加方法において重要な役割を果たすのが、小道具である。藤山さんは、小道具を用意する行為を「正直ちょっと参加している気になるわけよ」と語っているが、小道具は芝居のなかで使用される点で、演劇活動への新たな関わりの機会を提供している。つまり、小道具を用意する行為は、活動への新たなアクセスになっているのである。本研究では、これをアクセスの自主的創出とする。

レイヴ＆ウェンガー（1993）は、学習を知識の内化ではなく、「実践共同体への参加の度合の増加」（p.25）とした。新参者は、受動的な知識の受容体ではなく、実践活動における能動的な参加者なのであり、その参加の過程で学びを進めるのである。しかし、実践活動へのアクセスに関する問題について、レイヴ＆ウェンガー（1993）は、いかにしてアクセスが与えられ、いかにしてアクセスと接近するかなどの問題化に留まり、新参者によるアクセスの創出可能性については十分な議論を行っていない。もちろん、学習を「取り巻く共同体の学習のカリキュラムでの向心的（centripetal）参加を通して生じる」（レイヴ＆ウェンガー, 1993, p.83）とする捉え方や、「新参者の時折の貢献がきちんと取り上げてもらえることの両方のためには、参加の正統性が決定的に重要」（レイヴ＆ウェンガー, 1993, pp.104-105）とする点には、新参者が実践活動に与える影響が示唆されている。しかし、新参者によるアクセスの創出可能性に関する概念化は十分に検討されていないと考えられる。

先述の通り、正統的周辺参加の概念は、学習を「実践共同体（community of practice）への参加（participation）過程として、理解、叙述する」（高木, 1999, p.3）視座を提供し広く援用されてきた。しかし高木（1999）が、同概念は、学習者を「社会的実践の現場を生きるアイデンティティ構築主体としての『全人格』（whole person）として把握する可能性を開いた」（高木, 1999, p.4）と評価する一方で、同概念の発表時点では学習者の実践共同体の成員としてのアイデンティティ構築過程を示す十分な理論的展開がみられなかったと指摘し、その過程が、「実践共同体が用意する『期待される成員像』に学習者が従順に向かっていく過程（とその失敗）であるかのように叙述されてしまうことになった」（高木, 1999, p.5）と述べるように、同概念は、実践共同体に働きかける学習者を捉える視座が欠落していたと考えられる。本研究が確認した、参加者のアクセスの自主的創出行為は、まさに学習者が実践共同体の活動そのものに働きかける行為なのである。

上述の通り、本研究の語りからは、新参者によるアクセスの自主的創出の行為が確認され、その行為は新参者の活動への参加感を増幅させていた。また、増幅された参加感は、その行為が他の成員から肯定されることで、さらに安定した形で増幅することが次の語りから分かる。

> なんて優しいんだろう。そんな風に思ってくれたのかって、じゃあやっぱり続けるっきゃないなって。そういいでしょ。これが今のチームの良さじゃない。すごくそう思う。（藤山, 2019）

藤山さんの用意した小道具を使用する當さんが、その小道具を忘れずに芝居に取り入れようと心がけていると話したことについて、藤山さんは上の引用のように語った。他の参加者が自身の用意した小道具を積極的に使用する行為と、用意していることへの言及を他の参加者の優しさとして受容し、「じゃあやっぱり続けるっきゃないなって」と決意している。そしてこの決意

には、小道具の用意に対する責任の芽生えが認められる。ここで芽生えた責任は、小道具を用意する行為が柳塾という集団内で一つの役割として認められたという意味において、新参者が集団の活動に不可欠な役割を獲得し、それによって活動との関わりを深化させたことを裏付けるのである。

以上のように、アクセスの自主的創出は、観察行為から得た学びを実践に移し、他の参加者からその行為が認知されることで成立している。藤山さんの事例は、新参者が古参者の姿からヒントを得て、自らの力で実践活動へのアクセスを作成し、活動への参加に変化を加える参加方法があることを示すのである。

本節では、藤山さんの参加方法に変化を生じさせた経験や行為を検討した。新参者である藤山さんは、観察・被観察の関係が成立する活動内容及び活動空間での活動を通して、古参者の行為を観察すると同時に、他の成員から観察される経験を通して、活動への参加行為についての学びや、自身の行為への修正を加える機会を得ていた。また、古参者の観察から得た学びから、新たな参加方法を生み出すアクセスの自主的創出を行い、創出したアクセスである小道具が他の成員に認知され、使用が継続されることで、活動への参加感を増幅させていたことが明らかになった。

６．おわりに

本研究は、シニア演劇の活動に参加するシニアの活動参加過程を稽古空間及び特定の新参者と古参者の行為及び相互行為に着目しながら検討し、レイヴ＆ウェンガー（1993）の正統的周辺参加の概念を援用する形で、参加方法の変化とそれを促す経験や状況の究明を試みた。その結果、新参者は、活動空間の変化を伴う参加の過程で、(1) 観察・被観察の関係性が新参者の参加方法の変化を促したこと、さらに（2）観察経験から得た学びを活かし、活動へのアクセスの自主的創出を行い、参加感を増幅させていたことを明らかにした。つまり新参者は、活動空間の変化に伴い､活動への参加方法を変化させ､柳塾での活動と関わりを深めていたのである。

本研究の限界は、シニア演劇の活動を行う一つの劇団での参与観察及びインタビュー調査を用いた事例研究であるため、シニア演劇活動に参加した新参者の参加過程として一般化できない点にある。また、特定の新参者と古参者の経験に焦点を当てたことで、その影響関係を明らかにした一方で、参加者の段階的な参加や、演劇経験のある参加者の参加方法の変化など多様な活動経験を分析に反映できなかった。後続研究では、活動におけるより多様な参加過程や参加者間の関係に着目し、今回示した二点とは異なる参加方法の変化を促す経験や状況を検討する必要があると考える。さらに、本研究では、シニア演劇というシニアの活動を分析対象としているが、活動過程に対して加齢現象がもたらす影響は確認できなかった。このことは、調査時点で 75 歳以上の後期高齢者の参加者はいなかったため、活動過程に与える加齢の影響を把

握するには不十分であったことが指摘できる。他方で、シニアを対象とした活動であっても、シニア特有と捉えられるような特性が現われなかった点は、一つの研究成果とも捉えられる。アマチュアの演劇集団では参加者の年齢に拘らず、同様の参加過程が確認できると考えられるのだ。しかしながら活動名にシニアが銘打たれ、その活動を主体的に選択し参加する人たちがいる事実からは、活動名にシニアを掲げることの意味を明らかにする必要があると考える。そのため、後続研究では参加者の活動参加動機や役を加齢による変化が演技に与える影響などについての分析を通して、活動がシニアを対象とすることの意味を検討したい。

以上の残された研究課題の解明を通して､他者と自分との相互行為を通して芝居における｢わたし」を確立する演劇活動での人と人との関わりを考察し、シニアが演劇活動に参加することの意義を検討したい。

引用文献

Bradfield, E. (2021). *Creative Ageing: Participation, Connection & Flourishing A Mixed-methods Research Study Exploring Experiences of Participatory Arts Engagement in Later Life Through a Systematic Review of Literature and Focus Groups with Older People* (Order No. 28460554). Available from ProQuest Dissertations & Theses A&I. (2507249821). https://www.proquest.com/dissertations-theses/creative-ageing-participation-connection-amp/docview/2507249821/se-2

Lave, J.（1991）. Situating learning in communities of practice. In L. B. Resnick, J. M. Levine, & S. D. Teasley（Eds.）, *Perspectives on socially shared cognition*（pp.63-82）. American Psychological Association.

ウェンガー, E., マクダーモット, R. & スナイダー, W.M.（2002）. *コミュニティ・オブ・プラクティス―ナレッジ―*社会の新たな知識形態の実践. 櫻井祐子（訳）. 翔泳社.（Wenger, E., Mcdermott, R. A., & Snyder, W. (2002). *Cultivating Communities of Practice: a Guide to Managing Knowledge*. Harvard Business School Press.）

太下義之.（2016）. Creative Aging のための文化政策（特集 クリエイティブ・エイジング）. *季刊政策・経営研究*, 2016（4）, 85-128.

五島朋子.（2020a）. 日本における「シニア演劇」の現状と展望：演劇の専門家が主導するシニア演劇を事例として. *地域学論集, 17*（2）, 117-133. https://repository.lib.tottori-u.ac.jp/11248

五島朋子.（2020b）. 超高齢社会におけるシニア演劇の可能性に関する予備的考察: イギリスにおける中高年の演劇活動実践を事例として. *地域学論集, 17*（1）, 129-143. https://repository.lib.tottori-u.ac.jp/7398

園部友里恵.（2015）. 高齢者の演劇活動の展開―活動のねらいに着目した新聞記事の分析から

一. *演劇学論集 日本演劇学会紀要, 60*, 47-67. https://doi.org/10.18935/jjstr.60.0_47

園部友里恵.（2017）. インプロ（即興演劇）の学習形態と高齢者の変容. *老年社会科学, 39*（1）, 21-30. https://doi.org/10.34393/rousha.39.1_21

高木光太郎. (1999). 正統的周辺参加論におけるアイデンティティ構築概念の拡張: 実践共同体間移動を視野に入れた学習論のために. *東京学芸大学海外子女教育センター研究紀要, 10*, 1-14. http://webcatplus-equal.nii.ac.jp/libportal/DocDetail?txt_docid=NCID%3AAN00398786

森川洋, 桑原信治, 杉浦裕二, 金子純子. （2007）. セッティングズ・アプローチによる介護福祉士の活動の場の可能性 : 施設中心から生活者中心へ. 東海女子短期大学紀要, 33, 81-87. http://id.nii.ac.jp/1568/00003186/

レイヴ, J. & ウェンガー, E.（1993）. *状況に埋め込まれた学習*―正統的周辺参加―. 佐伯胖（訳）. 産業図書.（Lave, J., & Wenger, E. (1991). *Situated learning : Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge University Press.）